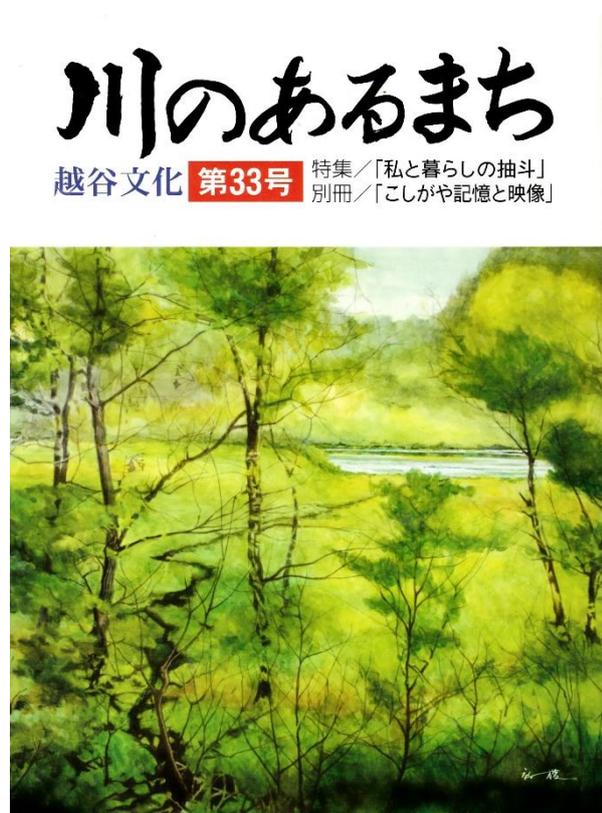


「川のあるまち 越谷文化 第33号」

大沢香取神社の彫刻

平成27年3月15日発行

越谷市教育委員会



「さみだれ川」第14回越谷市美術展覧会 受賞作品 高橋 幸一 画

「川のあるまち第33号」の表紙



前田慎一氏撮影の大沢香取神社

※中身の図版は、白黒印刷だったものをカラーにかえました

加藤 幸一

大沢香取神社の彫刻

加藤 幸一

明治元年（一八六八）に建立された大沢町の香取神社の本殿には、奥殿部分に東西南北の四方の壁に立派な浮き彫りの彫刻が施され、越谷市の文化財に指定されている。棟札によると大沢香取神社の奥殿は幕末の「慶応二丙寅年八月吉祥日」の「再殿」と記載されている。つまり奥殿は慶応二年（一八六六）に再建され、香取神社本殿は明治元年（一八六八）に今日のような姿に完成したのであろう。日本古来の神話や故事、中国の故事、大沢町の逆川での紺屋の染色や人々の生活の様子などが取り入れられて描かれている。

奥殿の彫刻師は、浅草山谷町の長谷川竹次郎である。明治以前の様子が描かれた貴重な彫刻と言える。「長谷川竹次郎」の名前が、西側面の床上の胴羽目の中で向かって右上端に縦書きで書かれていたことが、間近で見た目視調査によってわかった。

I. 東側面

① 床上（胴羽目・脇障子）

図I①1と2は富士の巻狩りが描かれている。1は富士の巻狩りの仁田四郎の猪退治の場面である。鎌倉時代のころ、源頼朝は家来を率いて富士の裾野において巻狩りを行った。仁田四郎もこれに参加していた。ある日、大きな猪が猛突進してきた。仁田四郎は慌てることなく馬に乗って駆け寄り、すれ違いざまに後ろ向きに飛び移り、刀を抜いて刺し倒した勇猛な武将である。

2は富士の巻狩りの曾我兄弟仇討の場面である。馬に乗る源頼朝のそばで、日ごろから父の仇討をねらっていた曾我兄弟が、機会を得て父のかたきの工藤祐経を討つ様子を描いている。なお兄の曾我十郎はその直後に仁田四郎に討ち取られ、弟の曾我五郎は工藤祐経の遺児に引き渡されて首を斬られる。

図I①3は脇障子に天の岩戸の場面の一部分が描かれ、八百万の神楽奏の様子である。天の岩戸の内に身を隠した天照大神を外に出すべく、天の岩戸の外で神々が神楽奏をして大騒ぎをしている様が描かれている。

全体



I. 東側面

① 床上 (胴羽目・脇障子)



I
①
2



I
①
1

富士の巻狩 (曾我兄弟の仇討ち) 富士の巻狩 (仁田四郎の猪退治)



I
①
3
(脇障子)

八百万の神楽奏 (天の岩戸)

② 床下 (下羽目)

図Ⅰ②の1から7は七福神である。鹿を従えた寿老人、布袋腹の布袋、琵琶を持つ弁財天、長い頭の福祿寿、鯛を釣り上げた恵比寿、鎧兜の毘沙門天、米俵を持つ大黒天が描かれている。

Ⅱ・西側面

① 床上 (胴羽目と脇障子)

図Ⅱ①1は「鹿嶋・香取神宮」と書かれた旗を掲げて参詣に向かっている様子である。

図Ⅱ①2は、図Ⅱ①1で向かって右上端に、香取神社の奥殿の彫刻をした「長谷川竹次郎」の名前が刻まれている。

図Ⅱ①3の中央の上部には長い矛を持った猿田彦大神が描かれている。地上へ天孫降臨するニギノミコトをお迎えして豊葦原の国(日本)へ道案内をするために待ち構えているのであろうと推測される。

脇障子の図Ⅱ①4は天の岩戸の一部分で、手力男命と天の岩戸の場面であらう。手力男命は、天照大神が天の岩戸の内にお隠れになっているのを天の岩戸の外にお出ましになってもらうために、岩戸のすき間が空いた瞬間に岩戸を

こじ開けようとしている様子が描かれている。

② 床下 (下羽目)

図Ⅱ②1・2は鶏、特に2は鬮鶏の場面である。大沢の町で盛んに行われていたのであろう。

図Ⅱ②3・4はともに孔雀が描かれている。孔雀は、毒虫や毒蛇を食べるため邪気を払う象徴となっていて、仏教の孔雀明王はそのよい例である。

③ 屋根下

図Ⅱ③1は獅子舞、2は碁打ちが描かれている。大沢の町人の生活の様子である。3は虎、4は竜である。竜虎がついになって描かれている。

Ⅲ・北側面

① 床上 (胴羽目)

図Ⅲ①全体は、源頼光が山伏に変装して大江山の酒呑童子の鬼退治に行く様子が描かれている。向かって左上端には鬼が遠めがねを覗いて頼光がやってくるのを今か今かと待ち構えている。

図Ⅲ①1は、山伏に変装して大江山に向かう頼光。2は途中で三人の神様に会い、毒の酒と星兜をもらう。3は頼

I. 東側面

②床下（下羽目）

「七福神」



I ②1. 布袋とコマで遊ぶ児童



I ②3. 弁財天



I ②2. 寿老人



I ②5. 恵比寿



I ②4. 福祿寿



I ②7. 大黒天とネズミ



I ②6. 毘沙門天

光が、鬼にさらわれて血のついた着物を川で洗っている女性と会う。4は頼光が、見張りの鬼たちに毒の酒を差し出す場面である。

② 床下（下羽目）

図Ⅲ②の1と2の上段には、二十四孝のうちの「郭巨」と「大舜」の場面が描かれている。

1は「郭巨」である。親孝行の郭巨とその妻は母の病気を治そうとして、母親の病気に効く薬草探しに行き、見つけた太い草の根を鋏で掘り起こそうとすると、黄金のかたまりが出てきたという話である。

2は「大舜」である。親孝行の舜が畑を耕していると、象や鳥がやってきて、舜の畑仕事を手伝おうとしている場面である。父は目が不自由で、母は幼い頃に亡くなっている。新しい母は舜に意地悪をする。舜はそれでも目の不自由な父を助けて畑仕事をする。それを知って感心した動物たちが舜のお手伝いに来たのである。舜は後に皇帝にまで出世し、国を治める要職を担う。

図Ⅲ②の1と2の下段の図は、大沢の香取神社の彫刻を越谷市の文化財に指定するにあたって、この図柄がきっかけとなったものである。紺屋の作業風景が描かれている。

3は藍瓶に布を入れて染色している場面である。4は布地を打ち叩いて布の皺を伸ばしたり、やわらかくしたりしている場面である。5は刷毛染めしている場面である。その向かって左では、この写真では見られないが、後ろを向いた人が布地に糊を塗っている様子と思われる場面が描かれている。6は布地の糊を川で洗い落としている場面である。逆川（鷺後用水）で行っているであろう。

IV. 南側面（正面）

IV 1は、琴棋書画のうちの「書（習字）」の場面である。4の写真でわかるように柏屋弥平太の習字の様子が描かれている。彼は俳号が「氷佳」と呼ばれた俳諧人である。2は唐子群遊のうちの「籠伏の鶏」の場面である。6の写真では、「柏屋久右衛門」の文字が見られる。鶏が籠から出されて柏屋弥平太によって闘鶏が行われている様子が描かれている。柏屋の子孫である秦野秀明氏によると、「柏屋は享保年間を初代とし、江戸時代を通じて長く越ヶ谷宿の御用旅籠屋を務め、その当主は四代に渡り、大沢町の年寄役を勤めた家柄です」とのことである。

全体



Ⅱ. 西側面

①床上（胴羽目・脇障子）



Ⅱ①4（脇障子）

たちからのおのみこと あま いわと
手力男命（天の岩戸）



Ⅱ①2

長谷川竹次郎

「長谷川竹次郎」の文字



Ⅱ①3

さるたひこのおおみかみ
猿田彦大神

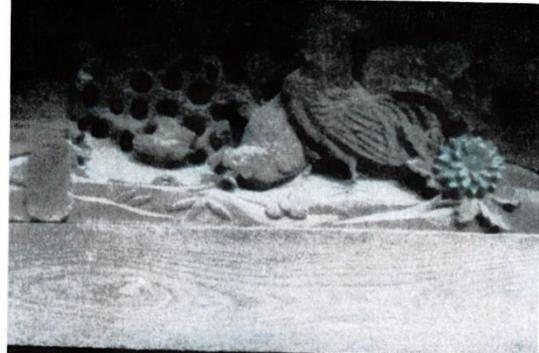


Ⅱ①1

かしま かとりじんぐう
「鹿嶋・香取神宮」参詣

Ⅱ. 西側面 ②床下 (下羽目)

全体



Ⅱ②2

Ⅱ②1

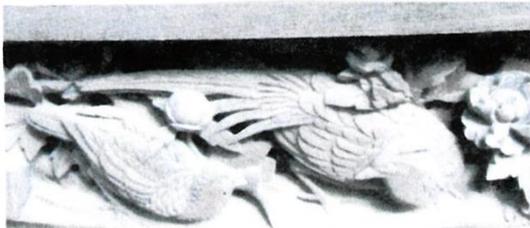


鬪鶏

鶏

Ⅱ②4

Ⅱ②3



孔雀

孔雀

Ⅱ. 西側面 ③屋根下

全体



Ⅱ③2



池ノ端富蔵の碁打ち

Ⅱ③1



辰五郎の獅子舞

Ⅱ③3



虎

Ⅱ③4



竜

Ⅲ. 北側面 ①床上 (胴羽目)

みなもとのらいこう

おおえやま

しゅてんどうじ

源頼光が山伏に変装して大江山の酒呑童子の鬼退治に行く様子



全体



Ⅲ
①
2

途中で三人の神に会い
毒の酒をもらう場面



Ⅲ
①
1

山伏に変装して
鬼退治に行く場面



Ⅲ
①
4

見張りの鬼たちに
ほら貝に入れた毒入り
の酒を差し出す場面



Ⅲ
①
3

鬼にさらわれ、血の
付いた着物を谷川で
洗う女性に会い場面

Ⅲ. 北側面 ②床下 (下羽目)

Ⅲ②2

全体

Ⅲ②1



上段：二十四孝のうち「大舜」
下段：紺屋の作業風景

上段：二十四孝のうち「郭巨」
下段：紺屋の作業風景



Ⅲ
②
4

布地を打ちたたく砧きぬた



Ⅲ
②
3

藍瓶あいがめに布を入れて染色



Ⅲ
②
6

布地の糊を落とす水洗い



Ⅲ
②
5

刷毛染めはけ

IV. 南側面（正面）上部



IV
2

からこくんゆう
唐子群遊のうちの「籠伏の鶏」

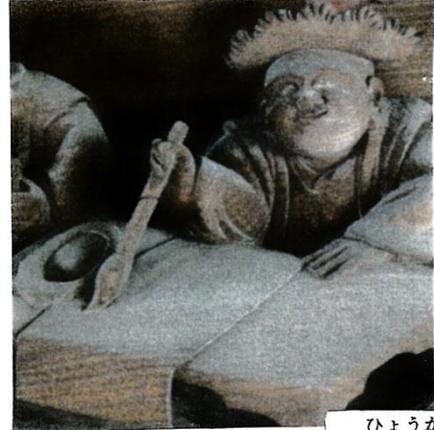


IV
1

きんきしょが
琴棋書画のうちの「書（習字）」



IV
4



IV
3

ひょうか
柏屋彌平太（俳号は「氷佳」）
の「書」



IV
6



IV
5

柏屋久右衛門の
「籠伏の鶏」